講演会「あの震災で独身は何を考え、どう動いたのか
～今、振り返るさまざまな震災体験～」

講師：酒井　順子氏

日時：2014 年 6 月 19 日（木）18：30～20：00
場所：立教大学新座キャンパス 4 号館N421教室
インタビュアー：逸見敏郎

■はじめに

伊藤　これよりボランティアセンター主催「エッセイスト酒井順子先生講演会・あの震災で独身は何を考え、どう動いたのか～今、振り返るさまざまな震災体験～」を開会いたします。

私はボランティアセンター職員の伊藤秀弥と申します。本日の司会を務めさせていただきます。

開会に先立ちまして、ボランティアセンター長の平野方紹からご挨拶を申し上げます。

平野　本日は夜遅い時間にもかかわらず、学生だけではなく、市民の皆様方にも多数、足を運んでいただきまして、本当にありがとうございます。

私どもボランティアセンターの活動の中で、東日本大震災の被災地への支援は今もなお大変大きな比重を占めています。本日の講師をお務めいただく酒井順子先生は、最新のご著書『地震と独身』の中で、ユニークかつ斬新な視点で被災地の問題を取り上げられました。また、本企画では、できるだけ本学出身の方に来ていただき、先輩の活躍している姿、生の声を学生に届けたいと考えておりますことから、ご登壇いただく運びとなりました。

本日の講演会は、一方的なレクチャー形式ではなく、会場の皆さんと対話しながら進める形で行います。皆さんにとってボランティア活動に対する理解を深める一助となれば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

伊藤　続いて、酒井順子先生のご紹介をさせていただきます。酒井先生は 1989 年立教大学社会学部観光学科をご卒業後、広告会社勤務を経てエッセイ執筆に専念。2003 年に刊行した『負け犬の遠吠え』はベストセラーとなり、講談社エッセイ賞、婦人公論文芸賞を受賞されています。本日の講演に関係いたします『地震と独身』をはじめ、精力的に執筆活動を続けられ、数多くの著書を刊行なさっておられます。

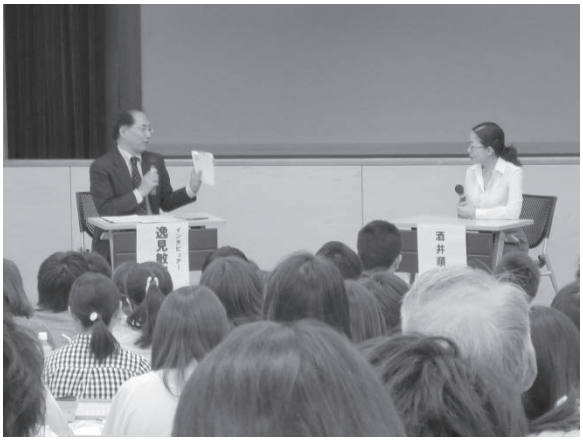
本日は、本学文学部教授でボランティアセンター副センター長の逸見敏郎がインタビュアーを務めさせていただきます。

■物書きのスタートは授業中の走り書きから

逸見　本日は、近著の『地震と独身』、この本に基づきながらお話をいろいろ伺っていきたいと思っております。よろしくお願い致します。

その前に、酒井さんは本学ご出身ということですが、どのような学生時代をお過ごしでしたか。

酒井　私のいたころはまだこの新座キャンパスはありませんでした。本日初めて伺いましたが、風が通り抜けていくような広々とした感じがいいですね。



学生時代は体育会のモーターボート・水上スキー部に所属していました。練習場が江戸川にあったので、毎日、江戸川のほうに通ってばかりいて、実は大学にはなかなか行けなかったんです。最低限の単位を取りつつ卒業させていただきました。大学に入ったら何か運動をしようと考えていたんですが、どうせなら、ちゃんと競技として勝負ができる種目がしたくて。メジャーなスポーツを今さら始めても勝負にならないでしょうから、水上スキーならいけるのではないかなと思ったんです。入ってみたら練習がつらく、本当に後悔しました。戦績としては、4年のときの最後のインカレで、トリックという種目で優勝することができ、当時「立教スポーツ」の一面を飾らせていただきました。

逸見　酒井さんが文章をお書きになり始めたのは、立教女学院高等学校時代だと伺っています。「マーガレット酒井」というペンネームだったそうですね。立教女学院の別名、聖マーガレットにちなんでつけられたのでしょうか。

酒井　何か名前をつけようと思ったときに、なかなか浮かばなくて、編集者さんから「マーガレットにいるんだから、これがいいんじゃないの」と言われて決めました。当時、『オリーブ』という女子高生向けの雑誌がありまして、それは今でもある『ポパイ』の女の子バージョンなんですが、私は『オリーブ』も『ポパイ』も高校時代よく読んでいたんです。とりわけ『ポパイ』で田中康夫さんと泉麻人さんが連載されていた、ライフスタイルとファッションで東京の大学を分類するコラムが面白くて。読みながらふと、「女子高版なら、私にも書けるかもしれない」と思い、授業中レポート用紙に書いて友達に見せたら、「面白いじゃん、これ雑誌に送ったら載るよ」と、彼女が『オリーブ』に送ってしまったんです。それが掲載されて、物書きの世界に入るきっかけになりました。

『オリーブ』の連載は大学時代もずっと続けていましたし、他の雑誌などに書評のような記事も書いていました。水上スキー部は拘束時間が長くて、普通のアルバイトはできなかったので、その代わりという感覚でしたね。当時はワープロもありませんでしたから、江戸川の川原で原稿用紙に書いて出版社に持っていったりしていたんですよ。

■「独身」という視点からたどる震災の記憶

逸見　僕は世代的にユーミンとサザンを聞いて育ったので、ご著書の『ユーミンの罪』は読んでいて非常にしっくりきたんです。あの本で描かれていた1992 年はバブルがはじけ、日本経済が低迷していくという時代。目の前のさまざまなものが、まさに泡となって消えるということが起こりました。2011年の東日本大震災でも同様に、我々がリアルだと思っていたものが、実はそれが幻想だったということに気づくようなことがあったのではないでしょうか。

東日本大震災から4年目を迎え、東京をはじめとする遠隔地では、震災直後の、いわゆる震災ショックという状況からは時間的な距離ができてしまったように感じています。この時間的距離は、忘却にもつながってくるでしょう。

ですから、今こそあらためて東日本大震災について考えてみたいのです。酒井さんの『地震と独身』は、独身者ということを切り口にした、非常に貴重な震災の記録だと思います。連載は 2012年 10 月から 2013 年 11 月まで『小説新潮』で連載されていたということですが、取材を始めたのはいつごろからですか。

酒井　2012 年の夏ごろからです。しばらくお話を伺いためてから書き始めて、あとは連載をしながら、現地に足を運んで取材したものを書く形式で進めました。

なぜ『地震と独身』という本を書こうと思ったの

か。今からちょうど 10 年前に『負け犬の遠吠え』という本を出したのですが、東京というまちは、結婚をしないでも生きていける環境が整っています。一人でご飯を食べても別に平気ですし、一人でいても周囲の視線が痛くて生きていられないということはないわけですよね。『負け犬の遠吠え』という本は、それで結婚しない男性も女性もどんどん増えていったのではないかという視点で書きました。その後も独身者の生きやすさは増していったと思うんですよ。そこに発生したのが東日本大震災。私自身も独身ですが、独身者と既婚者で震災時にとった行動や受けた感覚がだいぶ違うなと感じました。

震災後のメディアや新聞などの扱いを見ていると、独身者の物語というのはほとんど出てきません。震災1年後の式典でも、被災3県の代表としてお話しになっていたのは、ご家族を亡くされた方々でした。そのときにふと、でも、被災地にも独身の人はいたはずだと思ったわけですね。彼ら、彼女たちが揺れたとき、揺れた後にどう思ったのかというのは全然伝わってこない。私自身も独身で地震に遭ったわけですけれども、まわりの人の話を聞いていると、家族がいる人は家族のためにまず行動したりするけれども、独身の人は会社にずっといたとか、一人でいるのが怖くて友達と集まったとか、そういう知られざるストーリーみたいなものがいろいろ出てくるんです。こういう話は被災地のみならず、日本全国にあるんじゃないかなと思ったのが『地震と独身』を書こうと思ったきっかけでした。

取材対象として最初に頭に浮かんだのは、やはり被災地の独身者たちでした。津波が来た土地にも原発事故の被害の地にも独身者はいたでしょうから、そういう方に会ってお話を聞きたいなということで、まずは福島や仙台にいる友人に、独身の方を紹介してもらったんです。

逸見　インタビューをお受けになった方は、積極的に話したいという感じの方が多かったんでしょうか。

酒井　思い出したくないとか、お話をしたくないとおっしゃる方ももちろんいらっしゃいました。でも、ほとんどの方は快くお引き受けくださいましたね。中には本当につらい思いをされた方もおられました。我々東京の人間は震災の被害というものをつぶさには知らないわけですが、そういう人間に対して細かく説明することによって、だんだんと気持ちの整理がついていったとおっしゃる方もいらっしゃいましたね。

インタビューは基本、お一人1回の形式でしたが、独身者というのは、既婚者に比べて人生の変化が大きいんです。その後、結婚したり、出産されたり、中には出家した方もおられましたね。いろいろと思うところがあって永平寺に入りますと。そういう大きな変化があった方には、後日もう一度お話を伺ったりすることはありました。

出家した彼は東北の出身で、英語ができるので、現地に海外からボランティアグループが来たときに、地元のおじいちゃん、おばあちゃんたちと海外の人たちとの橋渡しをする活動をされていたんです。その中で、今の自分がお子さんやご家族を亡くされた方に何を言っても響かないんじゃないかと感じたというんです。たまたまお友達にお寺の息子さんがいて、震災前から「お坊さんにならないか」とスカウトはされていたらしいんですよ。震災でまわりに生じたさまざまな悲しい出来事を目の当たりにしたとき、1000 年、2000 年と続いている宗教の中に何かヒントがあるのではないか、それを学ぶことによって被災者の方々と話すときにもっと役に立てるかもしれないという気持ちから、思い切って仏門に入ってみることにしたということでした。彼はヒップホップ系というか、一見すると立教大学にいてもおかしくないような、今どきの学生といった感じなんですが、出家の道を選んだ。震災というのは、そういう一人一人の気持ちや行動をすごく変えていったんだなというのを実感させられました。

逸見　約 50 名の独身の方にお会いしたということですが、今お話を伺っていて感じたのは、被災された独身の方も酒井さんに話をすることで自分の経験してきたことに少し整理がついた。この相互性というのは不思議であり、大変興味深いです

ね。

酒井　私にとって、現在生きている方にインタビューをして話を書くというのは初めてのことでした。その上、つらい経験をされた方がお相手ということで、やはりお話を伺うのには相当緊張しましたし、言葉選びにも慎重になりました。いざお話をしてみると、当たり前のことなんですが、自分と同じ感覚を持つ人なんですよね。「被災者」というと特別な人たちみたいに考えがちですが、実際には恋愛のことで悩み、ファッションなどに興味を持つ普通の独身者だったんです。ただ、第三者に震災の体験を語る機会が、それまであまりなかったと思うんですね。被災者同士だと話しづらいこともあるようで、例えば、原発被害があった福島のようなところでは、避難するとかしないというのが、家族の中でも意見が分かれたり、付き合っているカップル同士でも違ってくるので、「私は逃げたい」、「僕は逃げたくない」というのを素直に言えなくなっている状況があるようでした。そういう話も、部外者というか、震災に直接関係のない人に対してははき出すことができるとおっしゃる方は結構いらっしゃいました。インタビューが、もしかすると自分の体験を客観的に見る機会になったかもしれません。

逸見　そういった独身の方々から話を伺う中で、酒井さんご自身が何か発見したことはありますか。

酒井　独身の方で震災のときに活躍した方というのが結構いらっしゃったんです。ボランティアは特にそうなんですけれども、やはりすぐに動けるのは独身者なんですよね。一刻も早くと被災地に向かったのは独身の方が多かったというのは、私が考えていなかったことでした。遠くに避難するというのも、小さいお子さんを抱えた方がほとんどなんだろうと思っていたんですが、独身の方でも沖縄や九州に避難したという方もいらっしゃいました。私が想像もしなかったような人生の変わりようがありましたね。

■生きる、働く―震災が人としての根幹を見つめ直すきっかけに

逸見　『地震と独身』の目次を拝見しますと、インタビューした内容が、「働いた」、「つないだ」、「守った」という形で整理されており、行為がストレートに見えてくるということで、読んでみたい気持ちにさせられます。

例えば、「つないだ」のところに出てくる 32 歳の新聞記者の女性。彼女自身が「どうして私が生き残ったのか」という、いわゆるサバイバーズギルトを覚えながらも乗り越えていく過程に心を揺さぶられました。彼女はこんなことを言っていますね。「伝える人間であると同時に、震災の当事者でもある」。震災を内側から見ているんですね。だから、「地元の人に不快な思いをさせてまで報道する意味があるのかと思ってしまう。被災者の話を美談や泣ける話に仕立てなくても、例えば、被災者の女性についてとか、生活に密着した情報を当たり前に報道することが地元紙の役割なのかと思います」と。酒井さんはどんなふうにお感じになりましたか。

酒井　彼女は震災前と震災後で仕事に対する意識が大きく変わったとおっしゃっていました。立教大学を卒業して東京の出版社にお勤めになり、その後、ふるさとに戻って地元紙の新聞社で働くようになったんですね。初めはちょっと都落ち感みたいなものを感じたそうです。でも、震災後に現地の状況を報道するようになってから、地元の方に感謝されて、「あなたにだったらこういう情報も」と提供があったり、励ましがあったり、そういった経験を通じて報道の本当の意味というのをあらためて考えるようになり、仕事への取り組み方が以前と全く変わったとおっしゃっていました。

東京にある大手の新聞社と地元の新聞社では、報道の仕方も違うんだということに気づかされたといいます。震災当初は、ちょっと泣ける物語みたいなものをつくっていくような大手新聞社の報道姿勢に対して腹立たしさも感じたようなんですけれども、だんだんそういうことを全国に伝えることが大手全国紙の役目だと思うようになったと。報道という仕事自体、自分が独身だったからできたんじゃないかなともおっしゃっていて、自分の人生の中での働くことの意味を見つめ直されたケースな

のかなと思いました。

彼女は被災者でもあり、かつ、報じなければならないということで、書く人間としてはものすごくぎりぎりの、とてもつらい立場だったと思います。でも、しなければいけないことだという使命感を覚えて行動していくようになったのはすばらしいなと感じました。誰かが報じないと伝わらないことは確実にある、そこに気づいたとき、彼女の中で何か目覚める部分があったのだと思います。

逸見　家業を継がなければいけないということで、震災後、Uターンする方も多かったようですね。

酒井　私が考えをあらためなければと思ったのは、女性で東北の実家の家業を継ぐために震災後戻ったという方が何人かいらっしゃったんです。継ぐといったら男の子なのかなという頭があったのですが、それは古い考えだと思い知らされました。石巻のご実家が土建業の会社というおうちでは、東京で OL をしていた姉妹の一人が、震災後、今帰らなければいつ帰るのかと、戻ってヘルメットをかぶって働いていたり、性別や年齢などは関係なく、自分の意欲のままに動いている女性たちが目立ちました。その意欲は使命感と言ってもいいかもしれませんが、郷土愛に目覚めたという人が結構おられましたね。震災によって、自分の根っこみたいなものがどこに結びついているかに気づいたという声が多かったです。

逸見　インタビューを拝見して、IT は非常に有効なツールだったのだと感じました。ボランティア情報はネットを通じて知ったという方が多かったですよね。震災支援と IT というところで、何かお気づきのことはありましたか。

酒井　ボランティアをしようと思い立ったときに、みんながまず見るのがネットでした。何かしたいけれども、方法も分からなければ、知り合いもいない。どうしようというときに、ネットで応募したり、仲間を見つけたりして、きのうまで見ず知らずだった人といきなり一緒の車に乗って石巻に行きましたとか、そういう新しいつながりがいろいろな方面で生まれていました。

現地でも、パソコン1台持っていれば情報を集めて臨機応変に動けるんです。あとは車があれば一人でもかなり多様な活動ができる。それは阪神・淡路大震災のときとはだいぶ違うなと思いましたね。

例えば、大槌町でネットを通じてボランティア情報の提供をされていた男性は、関西の方なんですよ。彼は東北の地理には詳しくないですから、地元の方と協力してネットワークをつくっていったといいます。最初は泥出しなどの大規模な力仕事みたいなものが必須でしたが、現地のニーズは時間とともに刻々と変わっていきます。専門知識も必要になってくるということで、彼は今も、東北各地を回りながら、ニーズを掘り起しつつ、情報をネットに上げて人々につないでいく役割を果たしていらっしゃいます

逸見　その男性のインタビューの中で、「自分たちはありがとうと言われることはあまりない。だけど想像の先の中で、ありがとうというのをお互いが言い合う関係を想像しながらこういうことをしているんです」という言葉が、僕にはすごく響きました。

酒井　ボランティアをされる方は、人のためになりたいと思っている方が多いのではないでしょうか。そういった好意がストレートに反映されるために、縁の下に彼みたいな人がいるという点は忘れてはならないと思います。彼の言葉で印象的だったのは、「今回の震災だけじゃなくて、ボランティアという活動そのものをもっとカジュアル化していきたい」ということでした。近所の子どもにサッカーを教えるとか、誰かがちょっとしたことで困っているときに手助けをしてあげるというのを、みんなが普段から気軽にすることによって、何かが起こったときに、さらに大きな運動につながっていくんじゃないかとおっしゃっていましたね。

逸見　ボランティアというと、何か決意を持って取り組むような既成のイメージがあると思うんですけども、カジュアルなボランティアというのはすごくいい考え方ですね。

酒井　身を粉にして働くみたいなイメージがやはり強いかもしれませんが、例えば自分の好きなこと、音楽が好きだったら音楽活動を通じて、自分も楽しみながら何かするとか、そういうところにボランティアの入り口というのはあるんじゃないかなとおっし

ゃっていたことには、なるほどなと思いました。

■「ほだし」なくして「きずな」は生まれない

逸見　2011 年をあらわす漢字として「絆」が選ばれて、震災の後というのは、言葉は悪いですけど「絆ブーム」みたいな形で、どこでもつながりだ、絆だ、みたいなことが言われていましたよね。僕はそういう動きに対して斜めに見てしまうところがあります。このご本の最後のほうの「ほだしと絆」というところにもありましたが、絆というのを「ほだし」という意味でとらえていくと、つながるだけではなくて、縛るという感覚もありますよね。

酒井　『徒然草』を読んでいると、「ほだし」という言葉が出てくるんですけど、子どもを持ってしまうと、それがほだしになって自分の自由にできないとか、結構悪い意味で使われることが多いんですね。「ほだし」ってどういう字を書くのかなと調べてみたら、「絆」だったんですよ。あ、同じことなんだと思って。イザという時は安心感を得るための「きずな」が、平和なときには「ほだし」になるということも考えられるんですね。震災の後は、非常時だったからこそ、「ほだし」が「きずな」化した。独身者というのは家族、夫婦とか親子の「きずな」をあまり重く持っていない人たちなわけで、「ほだし」がないからこそ自由に動けたというケースが多く見られました。

逸見　逆に、「ほだし」がないからこそ、自分が一体どこにつながっているのかということに目が向いたということでもあるんですかね。

酒井　そうですね。独身の方にとっては特に、自分が大切なものは何なんだろうとか、自分の根っこがどこにつながっているんだろうというのを考えるきっかけになったのがこの震災だったのかなと思います。

逸見　もう1つ、何もしなかった独身も少なくないというようなことがありました。動いた独身と動かなかった独身というのは、どこが違うとお考えですか。

酒井　震災後に、「震災婚」という言葉がはやりましたよね。絆がないことに茫然として婚活に走った人が多かったという報道があったんですけれども、確かにそういう震災婚をした人もいました。では、その後劇的に結婚が増えたり、少子化が改善されたのかというと、そんなことはありません。ということは、あんな大きなことがあっても結婚しなかった人のほうが多いんです。

それはなぜなのかなと考えさせられますが、動いた人というのは、案外ちょっとしたきっかけなんです。婚活したのも、会社で隣の席の人が結婚していいなと思ったからとか、そんな程度なんですよ。

ボランティアに行く行かないの違いも、同じではないでしょうか。たまたまきっかけがあったとか、誰かに誘われたとか、そういうところもあるので、動いた人と動かなかった人の間にすごく大きな溝があるということでもないような気がします。

ボランティアをカジュアル化したいというのは、まず一歩を踏み出しやすいように普段からしておくことから始まると思います。何もしたことがない人が、いきなり被災地に行くというのはかなり勇気も行動力も要ることです。軽いボランティアをしたことがある人のほうが、行動しやすかったのかなとは思います。

■質疑応答

逸見　では、ここからは会場で集めた質問票に酒井さんからお答えいただくという形で進めてまいります。本学の学生からです。「独身といっても若者と高齢者の震災が起きたときの行動パターン、震災後の生活はどう変わってしまったか。何か特徴的なパターンがあれば教えていただきたい」ということです。

酒井　私がこの本を書くときに考えた「独身」というのは、結婚している人のほうが多い年代だけれども、あえて独身でいるような人でした。20 代から 40 代ぐらいの人をイメージしてお話を伺っていたんですね。若い方で特徴的なのは、体力も時間もあるので、ボランティア活動に非常に身軽に動いていったということです。高齢者の方ですと、動きたくても動けないという方もいらっしゃったんですが、

会社や仕事をリタイアされて、自分のできる範囲でのボランティアをなさっていた方がとても多かった印象です

逸見　次は卒業生の方からです。「酒井さんご自身の中で、震災前とその後で、何か変化を感じていることはありますか。それから、この震災を風化させないために、これからも何か関わり続けたいと考えていらっしゃいますか。動けないままでいる自分のきっかけのために著書を読みます」ということです。

酒井　どうもありがとうございます。私も自分自身ボランティアをしたかというと、していないんです。しなきゃとか、したいなと思いながらも、中年だし、腰が痛いしとかいろいろ考えて、実際に体を動かすというところに行きませんでした。でも、そういううしろめたい気持ちがあったからこそ、この本を書いたということはあります。文章を書く人間として避けられないテーマであるとは思っていたので、自分が一番深く考えられるテーマを考えたときに、この「独身」という切り口が浮かびました。

被災地でいろいろ伺っていますと、知り合いや友達ができるんですね。1人でも知り合いができると、ニュースで見ているだけとはまた違う見方ができるようになると思います。学生なら、同じ学生同士の交流とか、それぞれ関心の深いところがあると思うので、そういったところからきっかけを見つけられるといいかなと思います。

逸見　本学の学生からです。「お話を聞いている中で疑問に思ったことの1つとして、人々の心を変えてしまうものは、実際には目に見えないものですが、何がそこまで人の心に影響が及ぶのだと思われますか」ということです。

酒井　多分、地域、年齢によって、それぞれ違うと思いますが、思い出したくもないようなつらい体験をしている人も被災地にはたくさんいらして、実際にお話を伺っていても、あちらも涙目になって、こちらも涙目になるみたいなことがしばしばありました。心身ともに大きなショックを受けたときに、心の根底にある部分が揺り動かされたという方もいらっしゃると思います。

被災地からは離れたところ、例えば東京とか、そういったところに住んでいる人たちの場合は、距離によって感じ方がすごく異なってくると思います。阪神淡路のときに東京の人が感じたことと、東日本のときに東京の人が感じたことというのは違うでしょうし、あの阪神淡路のときに感じなかった強いショックを感じている東京の方もいて、それでちょっと動いてみようかなとか、仕事に対する考え方が変わったとか、そういう変化が生まれてきたのかなと思いますね。

逸見　これも本学の学生です。「世間の風潮では、無縁社会という言葉もあるように、独身者は既婚者と比較してマイナスのイメージがあると思います。酒井さんにとって、独身の、特に女性の方が、この現代社会で生き抜くのに一番必要なことは何だと思われますか。多くの人にインタビューした中からでも、共通点など教えていただきたいと思います」ということです。

酒井　大切なことはいろいろあります。それは年齢によっても違ってくるもので、例えば私ぐらいの中年になってくると、友達がかなり大切になってきます。もう結婚しないかもしれないなと思ったときに、同じ年代の友達とのネットワークをつくっていくことによって、これからの生活のセーフティーネットとして備えるというのもありますよね。

もっと若い世代だとしたら、まだ結婚するかどうか分からないぐらいのときというのは、仕事が大切になってくると思うんです。結婚しなかったとしても、自分はこれをやって生きていこうと思えるものがあるのは重要なのではないでしょうか。

逸見　たくさんのご質問をありがとうございました。お寄せいただいたご質問にすべてお答えできないのは残念ですが、そろそろまとめに入らせていただきます。

2011 年3月 11 日からの時間的距離が日々どんどん広がっているということは、否めません。しかし、この日を経験した我々は、自分が何歳のときに、どこで東日本大震災を体験したという個人の記憶は持っているわけです。この個人の記憶に加えて、東日本の広範に及んだ地震、津波、それから原発事故といった社会的な記憶。これらは忘れ去ることができないものとして、我々が生きて

いる限り続きます。酒井さんの『地震と独身』は、この社会的記憶というものをより立体化する本であると思うのです。こういった記憶を出発点とした生き方、あるいは災害のとらえ方をそれぞれが持つことが、これから非常に重要になるのではないのかなと考えます。

酒井　これから生まれる子どもはみんな震災を知りません。今後お子さんを持つ人には、その記憶を伝えていく責任があるのかなと思っています。もし、まだ被災地に行ったことがない方がいらしたら、自分なりのきっかけや切り口を見つけて、1回でも足を運んでみていただけるといいかなと思います。

逸見　被災地に足を運んでみてくださいということに関して、立教大学東日本大震災復興支援本部が8月に陸前高田市にボランティアを2回ほど派遣します。同様に、本学コミュニティ福祉学部の東日本大震災復興支援推進室でも、学生団体の Three-S という団体が、学生ボランティアを東北に派遣しています。ぜひそういったところに参加して、個人の記憶と社会の記憶というものをつくり上げて伝えていっていただきたいと思います。最後に酒井さんはすごく大事なことをおっしゃいましたが、知らない世代が生まれてきたときに、記憶をきちんと伝えていくということも我々の責務ではないでしょうか。これをきょうの講演会の締めくくりとさせていただきます。ありがとうございました。

■閉会のあいさつ

伊藤　酒井先生、逸見先生、どうもありがとうございました。

閉会にあたりまして、本学チャプレンでボランティアセンター副センター長の宮﨑光よりご挨拶をさせていただきます。

宮﨑　本日はお集まりありがとうございました。そして酒井先生、本当にありがとうございました。私も一言だけ感想述べさせていただきます。やはりノンフィクション、あるいは実話というものは、必ずしもニュース性とかドラマ性があるものではないということを感じます。きょうのお話の中でも、涙が出てくるような話や感動秘話、美談といったものは、ともするとニュース、報道、あるいはドキュメントなどの中で事実を正しくは伝えていないということもあるかもしれないと感じました。その意味で、酒井先生はこの『地震と独身』の中で、声にならない声、あまりニュースで取り上げられなかったような声というものを取り上げてくださったのだと思います。

私たちも、一般受けするようなドラマにはならない、その人だけのドラマというもの、ストーリーというものに対して、常に耳を傾ける姿勢でいることが必要だと感じさせられました。1つの出会いが切り口となる。自分たちの立場なりの出会いのきっかけというものがきっとめぐってくるんだ。そこを大事にしていきたいと思います。

きょうは酒井順子先生のお話で、一人一人が課題を与えられたし、一歩踏み出そうという勇気を与えられたのではないでしょうか。酒井先生、本当にありがとうございました。

最後に、きょうこの会を後援いただきました埼玉県新座市に感謝いたします。立教女学院短期大学、酒井さんの出身校でもある立教女学院からも後援をいただきました。立教大学東日本大震災復興支援本部、コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援推進室が協力に名を連ねてくださいました。ありがとうございました。また、この本を世に送り出すのに多大なるご尽力をいただいた新潮社のスタッフの方に本日お越しいただきましたことにも、大きな感謝を申し上げます。

本日はお集まりいただきましてまことにありがとうございました。

講師プロフィール
酒井順子（さかい　じゅんこ）
　1989 年立教大学社会学部観光学科卒。卒業後、広告会社勤務を経てエッセイ執筆に専念。2003 年に刊行した『負け犬の遠吠え』はベストセラーとなり、講談社エッセイ賞、婦人公論文芸賞を受賞。他の著書に『29 歳と 30 歳のあいだには』『枕草子 REMIX』『都と京』『女子と鉄道』『金閣寺の燃やし方』『ユーミンの罪』、『地震と独身』など多数

インタビュアー紹介
逸見敏郎（へんみ　としろう）
　立教大学文学部教授。立教大学ボランティアセンター副センター長、立教大学キリスト教教育研究所所長。学校・社会教育講座教職課程主任。臨床心理士。専門は、臨床心理学 ライフコース論

【立教大学ホームページ掲載「講演会レポート」採録】

（掲載日 2014.07.17）

ボランティアセンター主催　酒井順子氏講演

「あの震災で独身は何を考え、どう動いたのか～今、振り返るさまざまな震災体験～」

日時　2014 年 6 月 19 日（木）18:30～20:00
会場　新座キャンパス 4 号館 2 階 N421 教室
講演者　酒井　順子 氏（エッセイスト）
【略歴】1989 年本学社会学部観光学科卒。卒業後、広告会社勤務を経てエッセイ執筆に専念。2003 年に刊行した『負け犬の遠吠え』はベストセラーとなり、講談社エッセイ賞、婦人公論文芸賞を受賞。他の著書に『29 歳と 30 歳のあいだには』『枕草子 REMIX』『都と京』『女子と鉄道』『金閣寺の燃やし方』『ユーミンの罪』、『地震と独身』など多数。
＜インタビュアー＞
逸見　敏郎（本学文学部教授、ボランティアセンター副センター長）

レポーター：コミュニティ福祉学部福祉学科 2 年次　武　彩花

レポート

東日本大震災が起きた直後、「絆」という言葉が注目されメディアでも家族の絆が多数取り上げられました。しかし、あの震災を体験した人の中には世帯のある方だけでなく多くの独身の方たちがいたはず…。そのような独身者から見た震災に注目し『地震と独身』の著者である酒井順子氏の講演会が立教大学新座キャンパスで開かれました。酒井氏はベストセラーとなった『負け犬の遠吠え』でも知られているエッセイストで、立教大学の卒業生です。

酒井　順子氏

今回の講演は、酒井氏と立教大学文学部教授（ボランティアセンター副センター長）の逸見敏郎先生との対談形式で行われました。まず、この本を書くきっかけとなったのは震災後、独身者はどうしていたのかという疑問を感じたことだったそうです。酒井氏はこの本を書くために震災を体験した独身の男女約 50 人にインタビューをしました。インタビューでは辛い経験を聴くことになるの

で緊張されたそうですが、実際に話をしてみると震災に対して感覚に違いは無い事に気づき自然と会話が出来たそうです。また、被災者にとって、酒井氏のように実際に震災を体験していない人との方が話しやすい話題もあり、それを話すことで心の整理をつけることができた方も多くいたといいます。お話を聞きながら、震災は家族や恋人との関係まで変えてしまう力を持ち、私たちは何も知らないからこそ傾聴することが大切なのだと感じました。

逸見　敏郎　教授

またインタビューを重ねる中で酒井氏はある発見をしました。それは独身者は自身の感覚に従ってすぐに行動できるということです。この発見は、独身者の行動を考える上で重要なポイントです。

『地震と独身』には独身者の話がいくつか出てきますが、そのうちの数人のお話が講演の中でも出ました。地元紙の新聞記者として働いているある女性は、震災後仕事に対しての意識が変わったそうです。被災者であり報道者であるという事実と、いつまでも被災者でいたくないという思いから、報道の意味をあらためて考えました。そして、同じ新聞でも地元紙ならではのスタンスがある事に震災を通して気付きます。そこに地元紙の記者としてのプライドをより強く持つようになったとのことです。またITを使ってボランティア情報を流通させるシステムを作った男性や、このような IT からボランティア情報を手に入れ被災地で活動し、そのまま被災地に引っ越すことに決めた女性もいます。

震災直後にボランティアとして駆けつけた人、そしてボランティアとして長期滞在した人は、独身者が多かったといいます。この事実には独身者には既婚者に比べて「ほだし」がないから自由に動けた事が考えられるといいます。興味深いことですが「ほだし」は絆と書きます。絆（ほだし）がない独身者は震災によりどう行動するかという人生における選択を迫られました。自由に動けることを利用してボランティアに動く独身者もいれば、家族の絆を求めて婚活をした人もいます。そして何も動かなかった独身者もいます。動いた独身者と動かなかった独身者には大きな違いはありません。彼らにとって震災は自分の大切な物は何なのか、自分の根っこはどこに繋がるかを見つめ直すきっかけであり見つめ直した結果で行動に違いが出ただけなのです。

この講演を聴き当時の日本の状況を思い出しました。「絆」があらゆる場面で多用されましたが、これは行動が出来ない代わりに心は繋がっているという事を強調しすぎた結果だと思います。また、私たちは震災により家族や友人・恋人とのつながりの大切さを認識しました。この認識を認識のままで終わらせるのではなく新たなつながりを形成しようとすることも大事なのではないでしょうか。社会が一人でも生きやすい環境になっているからこそ、大変な時には互いに助け合おうとつながる事が求められるのだと思います。次にほだしの無い独身者だから出来た事も多かったことにも気づかされました。しかし彼らの行動が報道で全て取り上げられるわけではありません。だからこそ私たちは報道の裏にある多くの声を聴こうとする姿勢が必要であると思いました。